

さんだんだ

三反田

県道の観音寺佐馬地線を観音寺に向かつて進むとき、残水の集落を過ぎ、油井井出（底巾一メートル四十〜五十センチメートル）の深い（道路面より四メートル下）暗渠を覗いて七十メートル程行くと東に折れ込む農道（道巾約二メートル）があります。この地点からさらに約四百二十メートル進むと、途中国道十一号線を越えて旧国道の交差点までの道路沿いから東側平均巾約百八十メートルの細長い地域が、土地の字名を三反田と呼ばれ、元大野原村の全域と同様一六四三年に、平田与一左衛門正重が、井関池堤塘の構築を始めたのと同時に、開墾を始めた所です。

それまでは所々に、喬木の林もありましたが、大部分は雑木の灌木やのいばら、すすき、雑草の生い茂った原野でした。もちろん、人家もなく、あるのはただ名も知れぬいくつかの塚と、自然を踏みにじったような巾一メートル余りの、丸亀街道や阿波街道が、寂しく原野を縫うて抜けているという、大した変哲もない侘しい所でした。

たまたま、近くの百姓が、この地域のある所に出水（しぜんに水がわき出る所）のあるのを見つけ、その付近を開墾し水田とし、この水をそそいで稲作を始めました。その面積が丁度三反歩（三十アール）あったところから、この田圃を三反田と呼び、

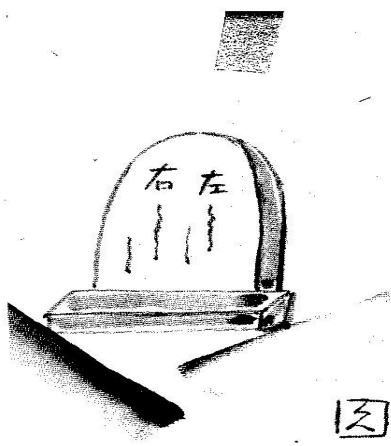
後に土地の字名をつける際、この地域をこの名にちなんで三反田と呼ぶようになったと、土地の長老から話を聞きました。

昔、わずか三反歩(三十アール)の田圃しかなかったこの地域も、今では人家は三十四戸が点在し、宅地が約一町五反歩(一五ヘクタール)その他は、ほとんど田でその面積五町歩(五ヘクタール)あまり耕作されています。

昭和の初期、豊稔池が構造されるまでは、月夜でも稲が早けるといわれ、田圃の角に掘られている野井戸の汲み上げや、井関池までの約三キロメートルに及ぶ幹線水路の昼夜を分らない井出番の当番など、灌漑用水に対する地域農民の血と汗の労苦は今の人には想像もできません。

その後、豊稔池、五郷ダムに続いて、県民多年の願望だった四国三郎と謳われた徳島県の吉野川の豊かな水の導入を計ったあの香川用水工事の完成で、水の問題も解消し、孜孜として豊地に取りくむ若い人たちの健気な姿に時代の変遷がひしひしと感じられます。

語る長老の三反田の由来はもつともだと受取れますが、さて誰が、いつ頃、今の何番地あたりを開いたかが、さっぱりわからないのが残念です。また、このような伝説や身をもってその労苦や辛酸をなめた往年を思い偲んで、目頭をうるませて語る長老と、恵まれた世代に何の屈託もなく育つて、一向に共感も湧かず、桃太郎や浦島太郎のおとぎ話でも聞いているよ



うな、
児童じどうを見るとき、
今日の世相こんにちの縮図せそうを見せつけられたような感情しゆくずを抑えるみことができませんでした。

〈池田武雄〉

『ふるさとむかしむかし』大野原町より